



里塚にて



かっぱ太郎

夕方の庭

「こんにちは」

薄紫色のアオイの花をいちりんたずさえ、すらりと背の高い女性が

夕方の庭にほほえんでいた。立ち姿が美しかった。

花が見事に女性をひきたてていた。

「きれいな... お花ですね。」

心の中では、立ち姿のほうを称賛しつつ、そうあいさつした。

数回しか会ったことのない私に、女性は気さくに話しかけてくれた。

「これ、持っていく？たくさんあるから、いいのよ。花びらが雨にぬれちゃってるけど、

ちょっと待ってね。今、袋に入れてくるから。」

彼女は、薄紫のアオイと、側に咲いていた白い花を2本、チョキンと切って、花束にした。

白い花は「エンレイソウ」という、「北大の花」だということだった。

「つるしておいてね。」

「ありがとうございます。」

ちゃんと水を入れたペットボトルに入れられ、ビニール袋にくるまれて、トラックの網棚に

そっと置かれた花たちは、ちょっぴり不満げに見えた。

「あなたがアオイをほめたりするから私たち、あのすてきな庭にいられなくなったのよ。」

エンレイソウは言った。

「あなたみたいな人じゃなくて、あのすらりとした奥さんに似合っていたのよ、私。」

薄紫のアオイが言う。

「ごめんね。だっていきなり『立ち姿が美しいですね』なんて言ったら、おかしい人だと思われちゃうでしょ。だからつい、あなたのほうをほめちゃったんだもの。」

「まあ、...しかたがないわね。」

花たちはそれきり、口をつぐんだ。そして、おとなしく網棚におさまっていた。

夜

夜、花を職場の机にかざっておいたら、すらりと背の高い上司の女性が気づいて、

「あら、とてもいい色だね。うすムラサキの。」

と、ほめてくれた。

ほめられたアオイは、今度はだまっていた。どうやら、すらりと背の高い女性には、

口ごたえをしないことにしているらしい。

アオイは、自分が庭で、あの奥さんを見ごとにひきたてていたように、今度は

白いエンレイソウが自分をひきたてていることに気づいたらしく、

「まんざらでもないわ。」

という顔をしていた。

その後

その後、わが家の食卓で夫にほめられ、翌日、たまたま遊びに来た私の両親にほめられ、

3つの花は数日間、得意げに毎日の夕食をひきたてていた。

ある朝、薄紫のアオイは、ぽとりと食卓に落ち、「がく」だけが残っていた。

「アオイちゃんて、口の悪い花だったけど、いなくなるとさみしいわね。」

白いエンレイソウたちが、小さな声でささやいているようだった。